

12.1 大規模造成地は年とともに地盤は強くなったか？

昭和 40 年後半から 50 年にかけて多くの造成は、民間や公社が中心となって盛んに進められました。当然ながら、計画は利便性がもっとも期待される都市部近郊や鉄道沿線ということになり、丘陵部や平野部がその対象となりました。造成の基本は、盛土と切土で計画範囲内で土砂の収支を合わせるような形で進められました。多くの造成地は 40～50 年経過していますが、その間に宮城県沖地震や東日本大震災を経験しています。1978 年の宮城県沖地震では、仙台市の造成地で多くの被害が発生し都市災害として注目されました。また、東日本大震災でも谷埋め盛土の地すべりで道路や住宅地が大きく被害を受けました。

造成地は、基本的には谷部に排水施設を確実にして、段切をしながら施工されていますので安定しているものと思われています。しかし、地下では地下水位が上昇したり、度重なる地震で土質が変質している可能性もあります。そうすると、表面だけでは明確に変状は判別できないわけで、いわゆる体質が劣化している可能性も少なくないと考えられます。建物や構造物であれば、目視或いは物理的な探査で経年劣化が確認されますが、土中では難しく、その変調が顕在化した時には手遅れになることがあるかもしれません。

特に、最近では気象環境が大きく変化していることから、造成地に対して監視しておく必要があります。その警戒すべきポイントについて、前兆や前触れとして注目すべきことをいくつか略記してみました。ほとんどのものがいつも見慣れているところですので、平常は特に気にしていないことばかりかもしれません。

1. 道路の変化が生じていないかどうか。目で見てわからなくても、大雨の後などに観察すると、水たまりが出来たりして判別できるものもあります。これが進行しているようであれば、町内会を通じて道路管理者への情報提供が必要です。
2. 大雨の時に下水があふれたりしていないかどうかも大事なポイントです。最近では、住宅地での内水氾濫が多くなっていて、突然に床下浸水などの被害が出ています。事前に土のうなど準備して対応しておく方法もあります。
3. 造成地の中には、背後が丘陵地と連続している場合があります。土石流の危険区域になっていることがありますので、確認しておく必要があります。ハザードマップで確認するとともに、発生時の避難方法も事前に確認しておくことが大切です。
4. 団地内の、ブロック塀、端部が斜面になっているところや、崖上になっているところは、これまでの地震でも崩壊している例が多いので、大雨や地震の時には変化の有無を確認しておくことも大事なことです。また、擁壁なども亀裂がないか傾倒していないか、水抜孔から土砂が流出していないかなども気を付けてほしいと思います。

造成地は年代が経過してきて、これまで何もなかったということが将来を保証するものではありません。地質での堆積物は古いほど固結されて安定するとも言われますが、人工改変したもの(盛土)は、逆に時間が経過しても地下環境や外力には全く歯が立たないということかもしれません。

12.2 ハザードマップを見たら、現地を確認してほしい

大雨が続いて、災害が発生しやすい状況になると気象庁や役所などからハザードマップを確認するようにアナウンスされることがあると思います。ハザードマップは自治体が発行しているもので、一度は目にしたことがあるかもしれません。ところで、ハザードマップは、どのようなところでどんなことが発生するのかが図示されていますので、凡例や説明を丁寧に読み取って、自分の地域にどんな災害リスクがあるのか、近くにどんなことがあるのかを知って、避難するタイミング、避難ルートなどを考えてほしいと思います。

ただし、一番重要なことは災害があったら見るのではなく、日常的に眺めて様々なシミュレーションをしておくことが大事なことです。そうでないと、避難ルートや様々な危険なことが災害の時には重なってくることから、すぐには行動できないことになるからです。

例えば、土石流の危険渓流として指定されているものが地域内にある場合には、流出土砂がどの方向に、どこまで押し出してくるのか、どのタイミングで避難すべきなどを地域で考えたり、専門家の意見を聞くようにしたいものです。そして、同様に大事なことは、危険区域といわれているところの現地を専門家に案内していただいて、なぜ危険なのか、どのようなことが起きうるのか、何をコントロールポイントにすべきなのかを指導してもらうことが絶対に必要なことです。そして、雨量計を設置するとか沢の流量を測定するとか濁りを調べるなど、自分たちでやれることがあれば検討することをお勧めします。これで安心感や避難するタイミングを知ることもできると思います。

ハザードマップを見ると同時に、現場を確認することで、地域への関心も高まります。自然災害はいつ起きるのかは大変難しいのですが、これまでの経験からどんなところに何が起きるのかは大体わかります。

		どんなところでおきるのか？	どんなことがおきるのか？
土砂災害	土石流	大雨の時に、沢から土砂が流れ出す。	沢から広い範囲で土砂や水が広がって、建物などに被害
	がけ崩れ	大雨や地震で、急な斜面が崩れる。	がけ下やがけ上の家が壊れ人にも被害
	地すべり	緩やかな斜面が押し出すように移動する。昔、すべったところでの繰り返し	土砂が押し出してきて、建物を壊す。
水害	洪水・浸水	川のそばや低いところで起きる。	大量の水が押し寄せてきて、家の中に侵入、避難が難しいときもある。
	内水氾濫	下水からあふれたり、地表にしみこまないで、雨水が集中して起きる。最近、多くなってきている。	普段、水がないところに急に現れる。目の前の景色が一変する。
造成地災害	沈下・陥没	もとは湿地など軟弱なところで起きる	建物が傾いたり、排水が機能しない。
	排水系	下水などの受け入れ能力が不足していたり、流木などで閉塞すると浸水する。	家の周りが湖のようになって避難するのが危険
	切盛境界	境目で地震の揺れ方が大きく変わる。	建物が大きく壊れる。
	すべり	谷を埋めた土砂が、地震の揺れなどですべる。	建物や道路、へいや擁壁が壊れる。時に大きな陥没が発生する。

マイ・タイムラインについてのほなし

最近、いろいろなところで、ワークショップなどで盛んになっていますのでよくその内容について聞かれることがあります。一言で言えば、災害が発生した時にどのタイミングで適切な避難を始めるのか、いわばスタートする状況を事前に想定して、それに合わせて様々な情報を取り入れることを準備するというか訓練しておくためのものになります。

これまでの災害のたびに言われてきているのは、警報などを出してもすぐに行動を起こさない、起こせないというような状況があつて、実際に避難できなかつたり最悪の場合には犠牲者になつたりした例もあります。

自然災害は必ず来るものではあります、いつ来るのかはわかりませんし、どのようなことが起きるのかは、実際に起きてみないと何ともいえないというのも事実です。思わぬ、想定外のことが起きますし、あとから考えるとそれなりの理由はあるのですが、災害はそれだけ多様性のある現象であるということだと思われまふ。したがって、事前にこのようなときに、このような行動をするといつてもその通りにはならないので、とつさに災害勘と応用力を駆使して適切な行動が必要になります。言つてみればサッカーの試合で、瞬間の状況を見ながら、味方に声掛けをしながら動いていかないとゴールにたどり着かないというのと同じだと思ひます。

災害時の避難は確かに勇気がいることすし、できれば避難したくないわけです。これまでも災害時に適切な避難が行われなかつた事例は少なくありません。その時々アンケートなどによれば、警報が出ても自分だけは大丈夫、これまでも何もなかつた、警報のたびに避難しては身が持たないなどが報告されたそうです。

災害は刻々状況が変わりますので、先が読めませんが、大事なことは正確な情報を手に入れて、先を読みながら先手を打つていくことす。そのために、災害があつたらどう行動するのかの基本パターンを日ごろから頭に入れておくことす、無駄のない適切な行動ができるということす。災害があれば警報に従つて避難所へ行くことなので、特に難しくないと考えがちですが、実際には突然の災害で頭が真っ白になつて、どうすればよいかわからなくなるといふことが経験した方々の多くの人が話しています。

そのために、マイ・タイムラインといふスケジュール表を持ち合わせて、災害時に柔軟に考へて行動することが薦められています。そうすることす、あわてずに余裕を持つて行動して避難できることになります。そして、情報を正確に判断するためにその情報の意味を理解しておくことが必要となります。つまり、いつ、何をすることすのかといふのを整理しておいて、いざといふときにそれを基本にさまざまに状況に合わせていくことすになります。情報で大事なことはその警戒レベルを理解することが基本で、避難のタイミングに直結します。マイ・タイムラインを作るといふことは、知る、気づく、考へるといふ段階をベースにして、確かな情報のもとに、避難するプロセスを組み立てることすもあります。自分の命も家族の命も自ら守るといふ意識をもって、逃げ遅れないことを最重点にしていきたいものす。

12.4 マイマップを展開することで、地域の災害リスクを知る

マイマップは、学校や地域の人たちと、自分の目で確認しながら、地域を見直し、他の人との情報を交換しながらつくる防災マップです。つまり、実際に避難ルートを歩いてみて、支障になるもの、危険なもの、役に立つものを確認していくことに加えて、大雨が降った後での観察などが主な情報源になります。そうして出来上がった地図は自分や家族のための防災マップとなります。大事なことは作ってしまっておしまいではなく、様々な機会に育てていくことです。例えば、他で災害などがあつたら、対岸の火事としないで、自分のところで同じようなことがあつたらどうするのかなどを、みんなで話し合っておくとよいと思います。地震の時と水害の時とは、避難の方法も避難するルートも避難所も違うことがあります。役所などが発行しているハザードマップから、地域で起きやすい災害や近くの様子などを知っておくことも大事なことです。つまり、広い範囲で災害を考えながら、地域で行動するということで、安全に避難する方法が案出できますし、他地域に居たとしても同じような行動ができると思います。

マイマップは、災害時にどう避難するのか、避難ルートはどうか、そのルート上には支障となるものや危険なものがあるのかを、知るためのものであります。加えて、作成するプロセスの中に重要なものがあります。それは、様々な情報を重ねることで、価値のあるものになっていくということです。災害は自然現象と暮らしとの反応ではありますが、公式はありません。これまでも様々な経験をしてきているとはいえ、同じような被害が発現するというよりも進化してきています。それがゆえに、マイマップの作成には多くの人が実際にに関わり、情報を提供しながら地域知を厚くしておくことで、災害が発生した時に多様な考え方が出来ます。そして、選択肢も多くなり適切な防災や減災につながるようになりますし、何と言っても災害への関心が向上します。また、学校での学習に取り入れることで地域との結びつきが促進されていきますし、共助の大切さについても大きく向上することになります。共助はコミュニティの劣化が指摘されて、その重要性が言われながらもその劣化防止や再興には良い手立てが見つかりません。このマイマップづくりは暮らしている人には必携ですので、災害への関心を高めていくことで世代を超えて様々な共同作業が可能だと思います。まずは学校教育の中で地域学習ということで災害を学んでいくことが一つの方法だと思います。児童や生徒から家庭へ伝達していく影響は大きいし、地域との連携が人的資源や情報提供という面で期待されるような気がしています。

マイマップを作ることで、単なる防災マップで終わらずに、そのプロセスを大事にして関心を持っていただき、ハザードマップやその他の地域情報を重ねることで、より明確な地域の災害リスクを知ると同時にその自然の恵みにも気が付いていくと思います。最近では、経験したことがないくらいの気象状況になってきていますので、災害の規模も頻度も多くなっています。マイマップを作ることを通じて、多くの人が情報を交換しながら地域コミュニティの醸成につながって欲しいと思います。

12.5 現場を見て災害をシミュレーションする

ハザードマップで自分の住んでいる近くに危険区域や警戒区域が示されていることがあります。あるいは、近くに危険渓流とか急傾斜地崩壊危険区域の看板などを見たことがあるかもしれません。しかし、その実態を知っていたり、見たりして、そこがなぜ指定されているのかを知る機会がないことが多いのです。昔と違って、山に入る機会がないこともあります。その状況を知っておくことは大変重要なことです。ぜひ、そのような危険区域や警戒区域について専門家の説明を求めていただきたいと思います。

例えば、土石流について、近くや背後の沢が何らかの指定を受けているところについての説明では、まずどのようにして土石流が発生するのか、これまでの履歴がないか、どこから土砂が生産されるのか、溪岸の状態とか植生に加えて水源涵養域などの説明がされるとと思います。その中では、土石流の前ブレや雨量のことなどが説明されます。実際に土石流がどのように発生するのかを現地でイメージすることで、避難のルートや避難所について、より適切な判断や選択ができるようになります。机上で、ハザードマップを眺めるだけでは十分ではありません。

水害にしても、実際の状況を再現することはできませんが、大雨の後に水たまりが出ていないか、内水氾濫が起きたらどのような光景になるのか、アンダーパスはないか、安全な避難ルートはどこか、どのタイミングで避難するのか、家に裏山があればどのような備えが必要か、など多くのことを現地を見て考えることはとても大事なことになります。水害は、これまでに様々な経験がありますので、地域の方とも情報の交換をしておく機会があると良いと思います。

災害では、何が、どこで起きやすいのかを知っておくことが大切なこととなります。そして、災害の種類によって避難の方法も避難する箇所も異なっていることがありますので、災害の性格というか特性を知っておくことで安全に避難できます。

例えば新しい住宅地などでは、古くから地元で暮らしている人がいないので、旧地形とか地域の伝承や災害の履歴に関する情報が多くないことがあります。地形や地質にかかわっている専門家に説明を受けて、地域の情報共有を皆で図っておくことは大変に重要なことです。

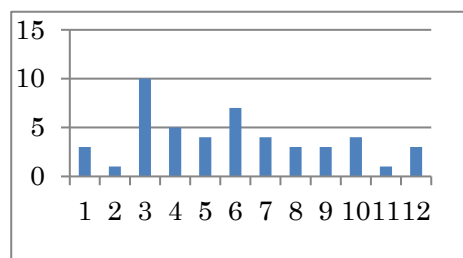
よく聞く話ですが、地域で災害に熱心な活動をしようとする、平時に乱を起こす人だといわれて敬遠され、災害に関心を高めようとしてもやりにくいことがあるそうです。自然災害は、この日本列島で暮らす限り、上手に共生していかなければなりませんし、気象が変化してきている中では、無関心では暮らせません。また、防災・減災では自助や共助は大変重要で、これらが充実していけば、公助自体も低コストになります。一番の高コストは行政任せということではないでしょうか。

現地を見る、現地で教わることは災害への関心を高めて地域のリスクを正しく理解することになり、地域や個人ができることを明確にします。ぜひとも危険区域が指定されている時には現場をフィールドワークしてほしいものです。

12.6 自然災害は何月に多く起きていたか

自然災害はいつ起きるかわからないとはいえ、いつごろ起きることが多いのか知りたいような気がします。というのも、あの2011年の東日本大震災の時は3月初めで雪もちらつく寒いときでした。空が暗く震えるような外気は災害の悲しみが何倍にもなるようでした。これが夏だったらまだ何か違っていたように感じました。

水害は大体どの時期に多いのかの見当は付きますが、地震はどうでしょうか。土砂災害は地震でも豪雨でも大きな影響を受けますので、発生する時期としての傾向はないような気がします。右の図は理科年表に取り上げられている1978年～2022年に発生した地震についての月別の発生回数を示したもので



す。つまりいつでも起きていますということですが、それ故に災害の大きさはもちろんですが、複数の災害が重なってしまうことが恐ろしいような気がします。重なることで、被害が拡大することになりますので、後遺症が心配になることと、避難するにしても何をどう優先するのか、という判断が大事なことになると思われます。また、救助、救援も困難になってきます。

複合災害の被害が多様化する中で、個人的な判断ではなく、共助として地域単位で対応することが必要になると思います。複合災害では、特に地域特性が大きな要因になるわけで、地域知をしっかりと理解して、即断して知恵や工夫が必要となりますので、地域の防災リーダーが全体を俯瞰して的確な指導をしていくことも、頭に入れて備えをしていくことが望ましいと思います。

そして、複合災害は被害もそうですが、復旧や復興も時間がかかることとなります。平常時から地域が災害に関心を持って、自分達でできることはするというのが大事になります。なにからなまでに行政任せというような意識でいると、いざ災害が発生した時に不満や文句だけがうっ積することになります。自分たちの地域は自分たちで守っていくことを当たり前にしなさいといけないわけで、町内会もそうですがさまざまな形で協力参画するという前提にして備えることです。

複合災害で注目すべきことは、土砂災害が絡むことです。豪雨は地山の性質を変化させ、地震は大きな外力によってぜい弱なところを顕在化させる作用が働きますので、土砂災害が発生しやすくなります。ハザードマップなどで警戒区域や特別警戒区域と指定されているところは注意しておく必要があります。また、どの段階で避難をするのかというタイミングも大切になりますので、発生時に発信される情報を正確に読み取って、より安全な方法を選択する必要があります。いずれにしても、専門家の協力を得て、平常時から災害時にはどのような状況が現れるのかについて、地域の情報共有を図っておくことで、災害時の判断が有効に働くようになるでしょう。

12.7 学校教育で学ぶ防災について

自然災害に対応するには科学的な知見と経験知が基本となりますので、そのような基本的なものを身に着けて関心を持ち続けることが大事なことになります。そういう意味では、学校教育の中で自分たちが暮らしている地域を知るという学習が大切なことは明白です。しかし、これを継続して定着したものにするには様々な課題があります。一つ目は教える側に、危機意識とか災害への意識を適切に理解することが必要です。二つ目は、そのための人材の確保です。専門的な面からのサポートを受けることも必要ではありますが、まずは地域に居る人材の発掘が大事なことです。地域に古くから住んでいる人の中には地域の歴史や文化に詳しい方が必ず居ますので、そういう方に協力してもらったり、地域の市民センターなどの情報を活用してプランニングするという方法もあると思います。これがうまくいくと、学校教育が成果を上げるとともに、地域の防災力も向上して、学校と地域が新たな災害文化を生んでいくと思います。そして、次世代の人材が広く要請されていきますので、いま児童や生徒である方々も重要な防災の担い手としての基本知識を持つこととなります。

日本人は、世界でも注目される災害列島で暮らして多様な文化を醸成してきていますので、子供たちが将来海外に行って自分の国を説明するときにも、歴史と風土を適切に説明できる人、自然災害を語れることは大変に大事な他国への民間貢献にもなると思われます。学校教育では、避難訓練といった実践型の備えと同時に、どうして災害列島なのかというような基本的な知識を習得することで、関心や興味が広がっていきますので、災害に限らずに広い視野で見る力を持つようにもなると思われます。

実際には、災害に遭わないと、防災といっても関心を持ってもらえないという方が多くいらっしゃると思いますが、病気になるように管理することこそが健康の秘訣であるというのは当然のことです。防災教育は、防災に関する知識や技術について学習しながら実践的なものを習得するという重要な目標があります。ここで大事なことは災害への関心を持続させるにはどうするのか、社会へ出てから、あるいは家庭人になっても生活の根本は防災への関心であるということ伝えていって欲しいと思います。確かに、防災は学ぶべき領域の一部ではありますが、この災害列島で暮らしていくために基本となることを改めて知る機会になってほしいと思います。

災害列島で暮らすということと国際的に貢献できる国になるためには、人間力、生活力(学力や知力)と市民力(連帯しての貢献)の三位一体をどのように醸成していくのかが、おそらく誰も期待しているものであらうと思います。しかし、実は、防災教育を実施するには大きな障害があることも知っておく必要があります。一つは、教育よりもハード対策を先行させよという意見があったり、二つ目は、災害は突発的でいつ起きるかわからないものを相手にしている余裕はないという考え方、三つ目は、防災教育が独自の位置を占めているという状況にはないことです。そして、発生してからでは間に合わないというのが災害であるということも事実です。

12.8 地理って、どんなことを学ぶのか。役に立つ地理とは・・・

「地理」とは、我々が暮らしている土地の様子のことを対象にして陸や海の地形、気候、人口、都市、産業、交通などのことと辞書では説明されています。人によっては地図帳や理科年表とか国勢図会の統計などを連想される方もいるかもしれません。

地理は暗記物でもなく物知りのためのものでもありません。また、解説でもなく、情報を広い視野で分析し、先を読み自然と共生していくための指針を提示する実践学なのです。地球で起きる出来事は、私たちの行動と暮らしに密接に関係していることを教えてくれるものでもあります。

現在は、小学校の社会科で地理的環境を学び、中学校では社会科で地理的分野として学習し、高等学校では地理総合として必修になっています。地理を学ぶということは、大きく3つのことが言われており、それを目標にしてさまざまな取組みがなされています。

一つ目は、自分の暮らしている地域から、日本、世界へと視野を広げて、多面的に多角的に探究していくことでより深い世界観をもって現象や事象を考えるということです。つまり、情報に基づいて分析していくということになります。

二つ目は、様々な知識だけでなく、自ら調査することで、どうすれば生活環境が維持継続されるのか、地域にふさわしい持続性のある地域環境について考察することです。そのためには、自然現象や経済、文化だけでなく、地域で暮らしている人々の考え方を聞き取ることも重要なこととなります。

三つ目は、最近重要視されてきているところの、知識や技能、技術を踏まえて、さらに思考、判断をして将来の構想をすることです。つまり、課題や問題点を明らかにして、将来への課題解決する創造性を身に着けるということです。

これらのことがらは、防災ということでも発揮されることで、生活環境が変化するという視点で考えていくことで、自然災害への関心が高まります。そして、その備えを構想することで、防災とともに安全で、安定した社会を日本そして世界が維持継続する明るい未来へ貢献できることにつながります。

日本列島は、自然災害の博物館といわれるぐらいに世界的にも高い頻度でさまざまな災害を経験します。例えば、地震でも発生する異なる現象は平野部や造成地といった土地の違いでも多様な被害が現れます。火山噴火にしても規模の違いでその影響は異なります。また、大雨といっても、梅雨、秋の長雨、線状降水帯、台風があり、日本海側では例年大雪となり融雪災害が多発します。このような自然現象は、近年の気候変動もあって、現象が多様化してきています。私たちはこの日本列島で暮らすわけで、自然環境の仕組みを学ぶことで相手を知り、災害が起きても、被害の最小化、適切な避難で命を守るというように、意識を強くした上で生活環境を守る社会の仕組みを、構築していく必要があります。それには、科学的な知見とともに経験知が大事なことです。国土地理院や地方自治体でも様々な地図を介しての情報が公開されています。そのような情報を読み解いて、防災へ応用していくというツールは、地理という科目の中で学習することができます。

12.9 自然災害に関心を持つことの大切さ（1）

われわれの子供のころは、草野球はごく普通の遊びでした。子供の数も多かったし、ちよつとした空地もあったし、大した道具もいらなかったこともあったと思います。いまは、サッカーボールを持つ子供も多く、サッカーへの人気が高いらしい。

ところで、今年のプロ野球は、ほぼ半年かけて両リーグともに関西の球団が優勝することになりました。野球はチームスポーツですので、一人のスーパースターや海外からの助っ人だけではなかなか勝ち続けることは難しい。かといって、草野球のように練習していれば強くなるというものでもない。長丁場を戦うわけですから、それなりの戦術を持っていないといけないわけで、いわば基礎力、応用力がかみ合わないと思われれます。

その基礎力は、それぞれの役割に応じた素質を見出して活性化することで、応用力とはそれを状況に合わせて開花させていく手立てであり、トップの息の長いマネジメントとそれを理解したスタッフの意気と投資力ということになります。

自然災害への対応も、実はこのプロ野球と同じように見えてくることがあります。自然災害は突発的で、発生すればどうにも手が出ないものですので、事前からの準備と発生した時の適切な反応が被害を最小にし、犠牲者を出さないことにつながります。しかし、災害は一過性のようにも思われ、時とともに風化するという特性もあります。いかに継続して次世代につなげていくのかという大きな課題もあります。

今回の優勝に関して、多くの方が指摘しているのは、地道にぶれない計画のもとに育成選手を育て上げたことが要因とも言われています。これまでの一過性の、起爆剤的なものではなく、確たる構想のもとで進めていくこと、常に評価分析をして修正をしながら目標に向かっていくということではないかと思えます。時間も辛抱を要することでもありますが、選手も球団もそのプロセスを理解して基礎づくりをすることで目に見えるものができてくることになります。それこそ継続することの大切さ、基礎力の重要性を改めて感じ、自然災害への対応の面でも、学ぶべき点があるように思われます。自然災害は必ず発生することを考えれば、基礎力を身に着けて、いざというときにはその応用力を発揮して被害の最小化を図ることのために、国民が合意して対応すべきことがあるように思えます。

もちろん、総論賛成で各論では反対というようなことを続けていけば、無駄な投資を続けていくことになるのは当然です。例えば、リスクに応じた土地の利用の仕方にして、一面的な対応だけでは不十分なわけで、全体を俯瞰した先を見据えた政策立案して進めていかないと、同じような或いはそれ以上の負荷が発生すると思えます。防災は、個々への対応というのは当然ですが、まずは国土保全という面での理念を明確にすることが大切です。縦割りで短期の政策ではなく、それぞれの期間を横断した明確な理念を見せていく必要が緊急の課題であり、南海トラフや首都直下地震が迫り、気候変動による異変が平常化している時に少々危機感がなさすぎるような気がします。（このコラムは令和6年能登半島地震の発生前に書かれました）

12.10 自然災害に関心を持つことの大切さ（2）

災害列島であることは、我々ではどうにもできませんが、それによる災害対応は我々の手で最小にすることはできると思います。極端に言えば、災害の対象物をなくす、あるいは減らすことです。そのためには、この災害列島を上手に使い分けること、つまりいまの状況を変えることです。わが国は人口と財産が沿岸の平野部に集中し、地方におけるこれまでの生活域、国土の7割の山地と流域では災害リスクはかなりの高さです。災害リスクを減らすには、自然災害への関心を高めることが必要で、学校教育が大きな役割を果たし、地域が暮らしの環境を長期の目で見直すことだと思います。このままのありかたで、安全で、安心した暮らしが少子高齢化、財政難の中で継続できるのか、ということです。

これまでは、何とか生きてきたかもしれませんが、それはスポット的なことで、永続するものではなかったのではないのでしょうか。チーム力が暮らしの大きな力になるには、一時的な起爆剤や一過性のものではなく、継続するためにはじっくりと持続していくべきものがあるはずです。基礎力がないのでは、一時の栄華はチーム力にはつながりません。

安全と風土を脅かすものは回避し、国土全体の利活用を真剣に考えることが必要になっているわけで、目先のことだけに視野を狭窄していると、手遅れになるというかその入り口に入っているということではないのでしょうか。国土保全にはハード対策による強靱化も流域治水もそれ自体は有効ではありますが、同時に大きな視野での環境の整備を見据えて落とし込んでいかないと後々の重荷になります。つまり、しっかりとした災害列島での利活用の理念があって、それぞれに対応するということがないといけないということです。

そのためにも、災害にかかわる多くの方々が、分野を超えて列島論を語り、国民の同意を得ながら政策化していくというような一元的な考え方、組織が必要な気がします。もちろん、各論的には痛みや権限の縮小などがありますが、それを超えるところに今の状況があるということです。予算や人材など多くの悩みを合理的に集合することで対応できるような気がしますし、それへのスタートを切るべきです。憲法改正論議と同じぐらいの国土の健全性を見直し論があってもよいと思います。いまの日本列島、暮らしの足元は変動期に入っていて、安心できる材料は何もないのではないのでしょうか。何かあればわが国には神風が吹くと思っている、のんきな国民性なのではないのでしょうか？それとも成長信仰をいまだに夢見ているのでしょうか？社会の真の強靱化を政策として国民の関心を集中させる状況に至っているような気がします。

自然災害に関心を持つことは、その暮らしの環境を知り、気づくことで考えるというようなプロセスを経験することでもあると思います。自然災害は自然環境を根源とする自然現象によってもたらされるわけで、この自然環境は、多様性に富んでいるがゆえに人間は知恵や工夫を重ねながら折り合いをつけて恐怖とめぐみを享受してきました。この関係が持続していくために、自然災害を切り口に自然環境の仕組みを知ることは大変重要なことではないのでしょうか。